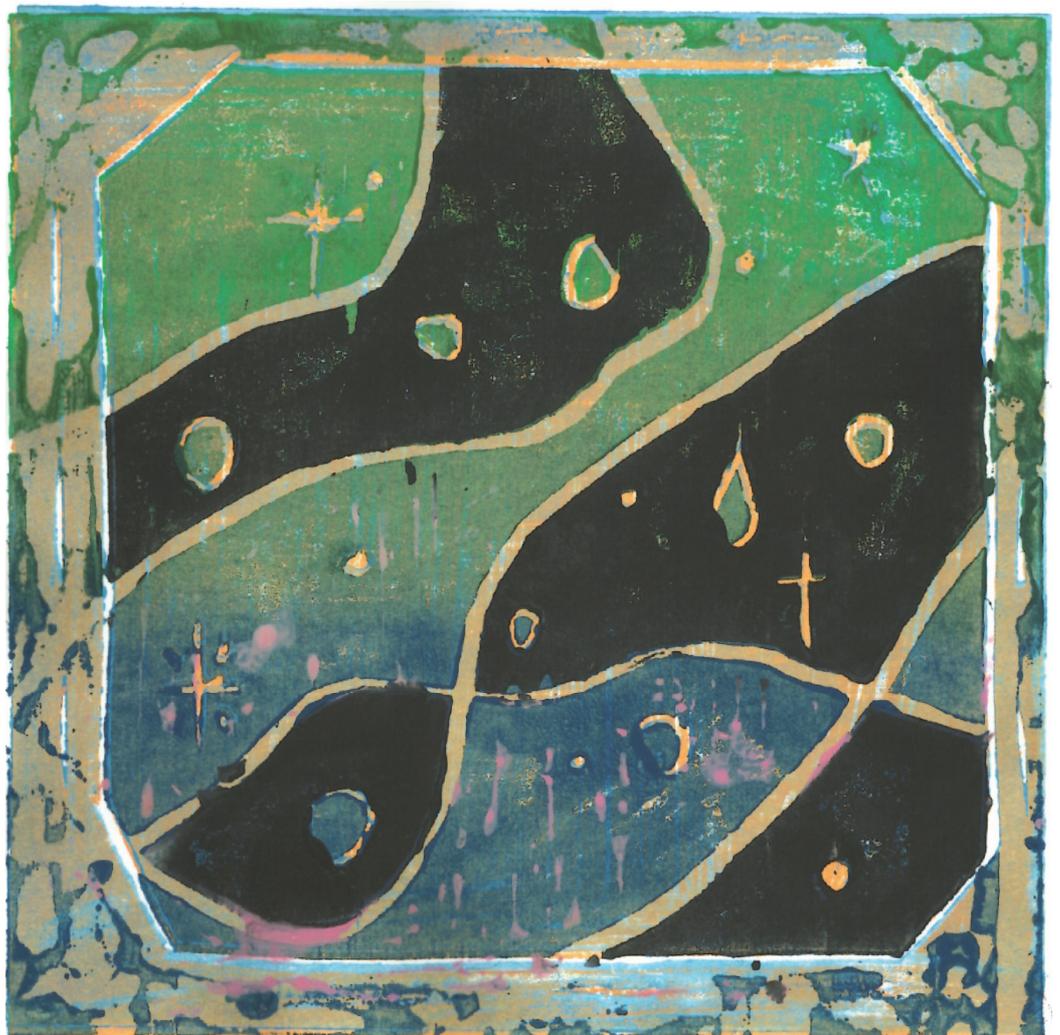


Total Rehabilitation Research

Printed 2017.2.28 ISSN2189-4957

Published by Asian Society of Human Services

*F*ebruary 2017
VOL. 4



Hitomi Murakami

[Feel at Heart]

ORIGINAL ARTICLE

QOLの観点に基づいた性教育の成果評価尺度の開発

船越 裕輝¹⁾²⁾ 小原 愛子^{3)*}

- 1) 琉球大学大学院教育学研究科
- 2) 沖縄県立那覇特別支援学校
- 3) 琉球大学教育学部

<Key-words>

性教育, 障害者, QOL

*責任著者: colora420@gmail.com (小原 愛子)

Total Rehabilitation Research, 2017, 4:47-60. © 2017 Asian Society of Human Services

I. 研究背景

1. 「障害者の権利」の観点からの性教育

2006年、国連総会において「障害者権利条約」が採択された。日本は2007年に本条約に署名をした。その後、日本国内において障害者に関する法整備が行われ、2014年、批准書を寄託し、「障害者の権利に関する条約」の効力が発生した。この条約は「障害を理由とする差別を禁止して、合理的配慮を行うことで、障害のない人と同等の市民としての権利と地域社会を保障すること」が確認されている(外務省, 2014)。この条約の第23条「家庭及び家族の尊重」では、「締約国は、他の者との平等を基礎として、婚姻、家族、親子関係及び個人的な関係に係る全ての事項に関し、障害者に対する差別を撤廃するための効果的かつ適当な措置をとる」と冒頭に述べ、障害のある人が「家庭を持つ権利」、「子どもを持つ権利」、「性教育を受ける権利」を認めている(千住, 2015)。障害者に特定した「性に関する権利」が明記されたことは初めてのことで、センセーショナルな条約となった。障害の有無に関わらず、性的な存在として認め合い、その権利を行使することは、当然の権利であり、普遍的な権利であることが、条約の中で強く示された。以上のように、障害のある人たちが、「性を学んだり、性を行ったり」することは「権利」なのであり、それに携わる人たちは、それを保障していく必要がある。

また、「日本国憲法」においては、その第26条の中に「能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する」と明記されており、障害の程度に応じた「教育を受ける権利」が、以前から示されている。それから、「子どもの権利条約」の第34条には、「性的搾取及び性的虐待から児童を保護すること」が明記されており、障害のある子どもも含めて、性的搾取や性的虐待から保護するためには、「性を知ること、性を学ぶこと」がもっとも重要である。

Received
December 20, 2016

Accepted
February 1, 2017

Published
February 28, 2017

「学習指導要領」(2005)には、「性教育に関する考え方とその関係教科、目標・内容・解説」が記載されており、それを受けて、東京都教育委員会(2005)は、「学校における性教育の基本的な考え」の中の「性教育の意義」の中で、「(性教育は)児童・生徒の人格の完成を目指す『人間教育』の一環であり、『生命の尊重』『人格の尊重』『人権の尊重』などの根底を貫く人間尊重の精神に基づいて行われるものである」と示している。

また、世界性科学学会(1999)は、「性の権利宣言」の中で、「包括的な性教育を受ける権利」を宣言しており、「年齢に適切で、科学的に正しく、文化的能力に相応し、人権、ジェンダーの平等、セクシャリティや快楽に対して肯定的なアプローチをその基礎に置くものでなければならない」、「性の権利は、すべての人々が他者の権利を尊重しつつ、自らのセクシャリティを充足し、表現し、性の健康を楽しむことを保護するものである」と謳っている(永野・関口, 2009)。

以上のように、「性を学ぶこと」は、障害の有無に関わらず、当たり前の「権利」であり、それに携わる人たちは「性の学び」を提供していくことが必要であると考えられる。

2. 「QOLの向上」の観点からの性教育

QOLとは、「Quality of Life」の略であり、「生活の質」と訳される。

1946年、世界保健機関(WHO)は、「健康とは、身体的、心理的、社会的安寧状態であり、単に疾患や障害がないことを意味するものではない」と健康について定義した。また、「生活の質」とは、「個人が生活する文化や価値観の中で、目標や期待、基準および関心に関わる自分自身の人生の状況についての認識」と定義している。それらの定義を踏まえ、WHOQOL26が開発された。

そして、1998年、日本語版が発表された。WHOQOL26は「身体的領域」、「心理的領域」、「社会的関係領域」、「環境領域」の4領域、全26問の質問項目から構成されている。さらに、その中の「社会的関係領域」の下位項目には、「人間関係」、「社会的支え」、「性的活動」が設定されている。質問項目の中のQ20「人間関係に満足していますか」では、「生活の中で親密な間柄を通して、望むような友情、愛情、支援をどのように感じているか」を問う質問項目、Q21「性生活に満足していますか」では、「性への衝動・願望、またはそれを適切に表現できるか否かに関すること」を問う質問項目がある(田崎ら, 2013)。質問項目の中にもあるように、「QOLの向上」が「身体的なつながり」、「情緒的なつながり」と関係していることが伺え、よって「QOLの向上」と「性に関すること」は、有機的につながっていると考えられる。

以上のように、「QOLの向上」という観点からの性教育は必須なものであると言える。

3. 性教育の成果と評価について

1) 国際的な性教育の視点

国際的な性教育の視点ということで、「国際セクシュアリティ教育実践ガイドンス(以下、「ガイドンス」)」と「WHOQOL26」に着目した。「ガイドンス」では、国連教育科学文化機関・ユネスコ(UNESCO)、国連合同エイズ計画(UNAIDS)、国連人口基金(UNFPA)、世界保健機関(WHO)、国連児童基金・ユニセフ(UNICEF)が協同し、セクシュアリティ教育に関わる世界の国々の専門家の研究と実践を踏まえて、2009年12月に発表された。

「ガイドンス」の主要概念は6つで、①人間関係、②価値観・態度・スキル、③文化・社

会・人権、④人間の発達、⑤性的行動、⑥性と生殖の健康となっている。また、年齢区分は、4つで、レベル1（5歳～8歳）、レベル2（9歳～12歳）、レベル3（12歳～15歳）、レベル4（15歳～18歳）となっている（浅井，2014）。

このガイダンスでは、今後の課題として、セクシュアリティ教育の「評価研究」に関する提起が述べられている。また、「評価されるプログラムに必要な事項」としては、a) カリキュラムもしくはグループを基盤にした性感染症、HIV、セックス、関係性の教育プログラム、b) 性的行動に焦点をあてて、c) アメリカの周辺と中にある18歳までの子ども・若者に焦点をあてて、d) 世界中のすべての場所で実行されること、などがあげられている。そして、「リサーチ方法に必要な事柄」では、a) 調和した介入と比較グループと両者の事前テストと事後テストデータの収集に関すること、b) 100のサンプルを持つこと、c) 性的行動について、1つ以上のプログラムの影響、d) 少なくとも、3か月間で急激に変化する行動についての影響を計測し、少なくとも6か月間でより少なく急激に変化する行動やその結果の影響を計測すること、などがあげられている（浅井，2016）。

「ガイダンス」の視点は、主要概念だけでなく、年齢区分も明確に示されている。しかし、評価に関する事項では、事前事後のテストや、100のサンプル、3か月間での変化など、特に知的な障害のある子どもたちを対象にした授業実践の評価には困難であろうと考えられる面も多々ある。

2) 性教育実践の理解へつながる評価

障害のある子どもたちの授業実践は、子どもたちの実態や課題、ニーズに合わせて創り出していくことが重要な視点である。そして、子どもたちの気持ちに寄り添い、理解しながら実践を重ねていくことで、授業以外の日々の関わりも構築されていく。

性教育実践の成果評価について、これまでは、子どもたちの「真剣な表情」や学習での様子をチームの先生や保護者と共有し合うことで、それを授業実践の成果や評価としていた。性教育実践の中で、実践者の感覚は重要であるが、実践者の中でも、性教育の成果評価に難しさを抱えているのが現状である。知的な障害のある子どもたちの授業実践の成果評価は、理解度のテストを行ったり、感想文を書いてもらったりすることも難しい現状があり、それらは明確な基準があるわけではないため、授業評価としての科学性に欠けるという課題がある。さらに、性教育実践の成果評価が課題となっている現状があるが、その成果評価の尺度は開発されておらず、障害者の性教育に関する明確な定義もされていない。

授業実践の成果評価を科学的に行うことは重要である。保護者や管理職、性教育に対して消極的な人たちへの理解につながると考える。

そこで、性教育実践の成果評価尺度を開発することで、実践者がそれを自己評価できるものが必要ではないかと考えた。

以上のように、本研究では、「障害者の権利」と「QOLの向上」の観点から、障害者の性教育の定義を行う。また、その定義を基に、性教育実践の成果評価尺度を開発し、その信頼性と妥当性の検証を行う。

II. 方法

1. 「障害者の性教育」の定義作成

論文検索データベース CiNii や J-STAGE、Google Scholar を用いて、「障害児」、「性教育」をキーワードに検索を行った結果に基づき、先行研究や文献、書籍から定義に引用可能な観点や文言（例えば、セクシャリティ教育など）を中心に収集した。収集にあたり、「障害児（者）性教育」に関係のない項目は除外した。

また、定義の作成にあたっては、特別支援教育研究者 2 名、現職教員 1 名、大学院生 2 名で行い、他分野の尺度や QOL、自立活動、ICF、学習指導要領、性教育の手引き（東京都教育委員会、2005）を参考に「障害者の性教育」の定義作成を行った。

2. 試案作成

1) 試案作成の方法

性教育実践の成果評価尺度は、子どもの変化に基づいた授業成果について測定しようという新たな試みであるということからも、因子分析的方法及び基準関連的方法に基づいた質問紙の作成を行うことは難しい。よって、本尺度の開発では、理論的方法に基づいて開発を行うこととした。本研究では、理論的方法に基づき、試案作成、内容的妥当性の検証、信頼性と構成概念妥当性の検証の手順で尺度開発を行う。試案作成は、構成概念の決定、項目執筆の手順を経て試案が完成される。構成概念の検討は、尺度作成過程の第一段階であり、かつ最も重要な作業であり、理論的実態を説明したものである（横内、2007）。また、質問項目の考案には、定義や背景となる理論に基づいて関連する文献や尺度などを参照しながら質問項目を考える研究者集団の情報に基づく方法と、構成概念の内容が反映されるような集団や個人に自由記述を求めたりして関連する言語データを収集する測定対象者集団から得る情報に基づく方法がある（横内、2007）。本研究では、研究者集団の情報に基づく方法で試案を作成した後、内容的妥当性の検証にて測定対象者集団から情報を得る方法を用いて項目を決定した。内容的妥当性の検証は、現職に対する意見調査や質問紙調査を行い、その結果を基に試案を修正し、本尺度の質問紙を完成させた。その後、完成した本尺度の信頼性及び構成概念妥当性を検証した。

また、本尺度開発に当たっては、「障害者の性教育」の定義を基にし、領域の設定を行った。そして、それぞれの領域の質問項目を作成し、注釈として、その質問項目に関する説明を作成した。また、領域の設定にあたっては、他分野において、性教育と関係のある項目や信頼性・妥当性が検証されている尺度や、関係法令を参考にした。

試案の作成にあたっては、特別支援教育研究者 3 名、現職教員 1 名で行った。

3. 内容的妥当性の検証方法

1) 対象と手続き

2016 年 7 月、障害のある人たちの教育や福祉に携わり、性教育実践を専門的に学んでいる数人を対象に質問紙調査を行った。そこでは、項目についての内容や言葉の表記が妥当であるかについて質問紙調査を実施した。

表1 内容的妥当性の質問内容と回答方法

番号	質問内容	回答方法
問1	性教育の成果を評価する上で、「からだに関する知識と表現」の領域が設定されたことは妥当だと思いますか	5件法
問2	性教育の成果を評価する上で、「性に関する安心感」の領域が設定されたことは妥当だと思いますか	5件法
問3	性教育の成果を評価する上で、「性に関する自他の認識」の領域が設定されたことは妥当だと思いますか	5件法
問4	尺度の各領域についての内容や言葉の表記についてご意見等ありましたらご記入ください	自由記述
問5	Q1（性教育の実践を通して、からだの部位の名前について、正確な知識を身につけましたか）が「からだに関する知識と表現」領域の項目に設定されたことは妥当だと思いますか	5件法
問6	Q2（性教育の実践を通して、からだの部位のはたらきについて、正確な知識を身につけましたか）が「からだに関する知識と表現」領域の項目に設定されたことは妥当だと思いますか	5件法
問7	Q3（性教育の実践を通して、からだへの快と不快がわかり、その快と不快を表現するようになりましたか）が「からだに関する知識と表現」領域の項目に設定されたことは妥当だと思いますか	5件法
問8	Q1～Q3の各項目についての内容や言葉の表記についてご意見等ありましたらご記入ください	自由記述
問9	Q4（性教育の実践を通して、成長していくからだについて知ることで安心感が得られるようになりましたか）が「性に関する安心感」領域の項目に設定されたことは妥当だと思いますか	5件法
問10	Q5（性教育の実践を通して、いろいろな感情を知ることで、安心感が得られるようになりましたか）が「性に関する安心感」領域の項目に設定されたことは妥当だと思いますか	5件法
問11	Q6（性教育の実践を通して、性に関する自分の感情を（ことばや身振り行動などで）表現するようになり、それを聞いてもらうことで、安心感が得られるようになりましたか）が「性に関する安心感」領域の項目に設定されたことは妥当だと思いますか	5件法
問12	Q4～Q6の各項目についての内容や言葉の表記についてご意見等ありましたらご記入ください	自由記述
問13	Q7（性教育の実践を通して、性的な行動に対して、時間と場所の区別を認識するようになりましたか）が「性に関する自他の認識」領域の項目に設定されたことは妥当だと思いますか	5件法
問14	Q8（性教育の実践を通して、性的な言動や関わり方について、認識するようになりましたか）が「性に関する自他の認識」領域の項目に設定されたことは妥当だと思いますか	5件法
問15	Q9（性教育の実践を通して、性の多様性について、認識するようになりましたか）が「性に関する自他の認識」領域の項目に設定されたことは妥当だと思いますか	5件法
問16	Q9～Q11の各項目についての内容や言葉の表記についてご意見等ありましたらご記入ください	自由記述

2) 質問紙

質問紙は、回答者の基本属性と本尺度の内容的妥当性について記入できるようにした。回答者の基本属性は、年齢、性別、職業、特別支援学校教諭免許状保有の有無、社会福祉士資格の有無、その他の資格、本職業の通算経験年数（臨時等も含む）、障害のある人たちとの関わりの通算経験年数について記入するようにした。

また、本尺度の内容的妥当性に関する質問紙は、問 1～問 16 で構成され、以下の内容について回答してもらった（表 1）。問 1～問 3 は、領域の設定に関する妥当性について、問 5～問 7、問 9～問 11、問 13～15 は、各質問項目の妥当性に関して尋ねた。回答形式については、「5=きわめて妥当である」、「4=妥当である」、「3=どちらかという妥当である」、「2=妥当でない」、「1=まったく妥当でない」の 5 件法で回答してもらった。また、問 4、問 8、問 12、問 16 については、各領域及び各質問項目のことばの表記が適切かどうか自由記述で回答してもらった。

質問紙の回答形式である「きわめて妥当である」、「妥当である」、「どちらかという妥当である」を「妥当である」と評価し、「妥当でない」と「まったく妥当でない」を「妥当でない」と評価する。

また、自由記述の結果を基に、研究者との協議を重ね、より回答しやすい質問紙になるよう、項目の言葉の表記について検討し、試案の修正を行った。

4. 信頼性と構成概念妥当性

1) 対象と手続き

2016 年 8 月～9 月、障害のある人たちの教育や福祉に携わり、性教育実践を行っている人を対象に質問紙調査を行った。

5. 統計分析

1) 信頼性

信頼性の検証は、(Han, et al, 2004) の方法を参考にし、内的整合性法を使用した。本尺度の内的整合性には Cronbach α 値を使用した。信頼性係数が 0.5 以下の場合、尺度の信頼性はあるとはいえないが（横内, 2007）、0.7 以上あれば信頼性は高いと判断される（Chronbach, 1951）。

2) 構成概念妥当性

構成概念妥当性の検証には、SEM (Structural Equation Modeling; 構造方程式モデリング) を用いた。SEM は、回帰分析、パス解析、共分散構造分析等によって構成概念を用いたモデルの適合度を調べることができる（豊田, 1998）。SEM で分析する場合、どの適合度指標に着目するかは研究者の判断により、通常、RMSEA を含む 2 つ以上の適合度指標が満たされている場合をよいモデルという（Steiger, 1998）。本研究では、モデル適合度に指標として、RMSEA と CFI、GFI を用いる。RMSEA < 0.1（小塩, 2011）となっており、0.0 に近いほど適合度が良い（室橋, 2003）。CFI > 0.90（Han, et al, 2014）となっており 1.0 に近いほど適合度が良い（室橋, 2003）。GFI > 0.95（Shevlin & Miles, 1998）となっており、1.0 に近いほど良い（小塩, 2011）。統計解析には Amos ver.4.0 及び SPSS ver.24.0 を使用した。

III. 結果

1. 「障害者の性教育」の定義作成

定義の作成において、先行研究や関連する文献、書籍、他分野の尺度、QOL、自立活動、ICF、学習指導要領、性教育の手引き（東京都教育委員会，2005）を参考に、特別支援教育研究者2名、現職教員1名、大学院生2名で行い、他分野の定義を参考に「障害者の性教育」の定義を作成した。

その結果、定義として「障害者の性教育とは、障害のある人や家族、教師、支援員などの関係者に対し、公的な場において、人権の保障や QOL 向上の観点から、性的存在としての自他を認識すること、そして、性的自己決定権を行使するための知識・判断力・行動力を身につける教育である」とした。

また、以下に、定義作成の理由を述べる。性教育の対象を「障害のある人や家族、教師、支援員などの関係者に」した理由は、障害のある人だけでなく、多くかかわる家族は勿論のこと、学校の教師、放課後児童デイサービスや障害者施設も含めた支援員など関係するすべての人たちも一緒に含めて対象とすることで、よりよい性教育が成立すると考えた。性教育の場を「公的な場において」にした理由は、性教育は、公的な責任の下で行っていく必要がある、敢えて家庭は含めていない。「人権の保障や QOL 向上の観点から」を入れた理由は、国際的な流れでもあり、普遍的な価値観であると考えたからである。「性的存在としての自他を認識すること」を入れた理由は、性的な存在として、自分自身と他者を認めることは、当然のことであり、他者との関係性の中で、自己を確認し、そしてそれを承認することによって、それが自尊心を持つことへ繋がっていくと考えたからである。「性的自己決定権を行使するための知識・判断力・行動力を身につける」を入れた理由は、性的自己決定権とは、人類普遍的な価値観であり、行使できることが大切であると考えた。また、性の知識を学習するだけでなく、その知識を使った判断力を学び、さらに行動する力を身につけることが最終的な目標になると考えた。結論として、知的障害児者の性教育は性的な問題に対しての「対処療法的な性教育だけではなく、「権利の保障」、「QOL の向上」の観点から、人類普遍的な価値観である、「性的自己決定権が行使できるような」性教育の実践が必要である。

2. 試案作成

1) 試案

「障害者の性教育」の定義を基に、性教育の成果評価尺度の構成概念を「身体的側面」、「心理的側面」、「社会的側面」の3領域を設定した。そして、領域の内容をわかりやすくするために、それぞれの領域名を「からだに関する知識と表現」、「性に関する安心感」、「性に関する自他の認識」とした。「からだに関する知識と表現」領域が Q1～Q3 の3項目、「性に関する安心感」領域が Q4～Q6 の3項目、「性に関する自他の認識」領域が Q7～Q9 の3項目とし、3領域9項目の試案を作成した（表2）。

領域の設定は、QOL に共通した概念であり、性教育実践の成果評価を行う上でふさわしいとされる領域を設定した（韓ら、2014）。また、項目収集についても QOL の項目に共通した内容を抽出した。それぞれの質問項目に注釈があるが、これらは、性教育実践の中で使用されている内容や言葉の表記を参考にした。

表 2 性教育における成果評価尺度（試案）

からだに関する知識と表現（身体的領域）
Q1 性教育の実践を通して、からだの部位の名前について、正確な知識を身につけましたか。
Q2 性教育の実践を通して、からだの部位のはたらきについて、正確な知識を身につけましたか。
Q3 性教育の実践を通して、からだへの快と不快がわかり、その快と不快を表現するようになりましたか。
性に関する安心感（心理的領域）
Q4 性教育の実践を通して、成長していくからだについて知ること、安心感が得られるようになりましたか。
Q5 性教育の実践を通して、いろいろな感情を知ること、安心感が得られるようになりましたか。
Q6 性教育の実践を通して、性に関する自分の感情を（ことばや身振り行動などで）表現するようになり、それを聞いてもらうことで、安心感が得られるようになりましたか。
性に関する自他の認識（社会的領域）
Q7 性教育の実践を通して、性的な行動に対して、時間と場所の区別を認識するようになりましたか。
Q8 性教育の実践を通して、性的な言動や関わり方について、認識するようになりましたか。
Q9 性教育の実践を通して、性の多様性について、認識するようになりましたか。

2) 採点方法

採点方法は、性教育実践の成果評価を実践者が1～5で段階的に評価できるようにした。1「ほとんどない」、2「少しだけ」、3「多少は」、4「かなり」、5「非常に」の5段階的で評価する。各領域の合計点は、「からだに関する知識と表現」と「性に関する安心感」の領域では、5=10点、4=8点、3=6点、2=4点、1=2点とし、領域の合計はそれぞれ30点とした。「性に関する自他の認識」領域のQ7とQ8は、Q1～Q6と同じ採点方法とし、Q9のみ、5=20点、4=16点、3=12点、2=8点、1=4点とした。そして、その領域の総計を100点とした。

Q9の「性の多様性」に関する質問は、他に比べ重要性が高いという仮説を立て、点数は他の2倍にし、重み付けをした。

3. 内容的妥当性の検証

内容的妥当性の検証として、2016年7月、性教育実践を専門的に学んでいる現職3名に対して質問紙調査を行った。性別は男性2名、女性1名で、平均年齢は、50歳であった。職業は特別支援学校の教員2名、福祉作業所支援員1名であった。障害のある人たちとの関わりの通算経験平均年数は、27年8か月であった。

質問紙調査による分析の結果、すべての領域と質問項目において、5点中4点以上で、80%以上が妥当であるとの回答が得られた（表3）。

表3 領域別、質問項目別の平均点 (n=3)

領域や質問項目	平均 (%)	領域の平均 (%)	
領域① Q1	4.67 (93)	4.33 (87)	
	Q2		4.33 (87)
	Q3		4.00 (80)
領域② Q4	4.33 (87)	4.67 (93)	
	Q5		4.33 (87)
	Q6		4.00 (80)
領域③ Q7	4.67 (93)	4.33 (87)	
	Q8		4.33 (87)
	Q9		4.00 (80)

4. 信頼性と構成概念妥当性の検証

1) 対象

質問紙は120件回収した。しかし、欠損値が含まれていたため、分析対象となったデータは96件であった。対象者の基本属性は、表4の通りである。

対象者の平均年齢は41.54±8.22歳で、性別は、男性36人(37.5%)、女性60人(62.5%)、その他0人(0.0%)。職業は、教諭54人(56.2%)、養護教諭6人(6.3%)、寄宿舍指導員25人(26.0%)、福祉作業所支援員4人(4.2%)、その他7人(7.2%)、特別支援学校教諭免許保有の有無は、56人(58.3%)、本職業の通算経験年数は、15年0か月±8年0か月、障害のある人たちとの関わりの通算経験年数の平均は14年2か月±8年8か月であった。

表4 対象者の基本属性 (n=96)

基本属性	平均±標準偏差 又は n (%)	
年齢	41.54±8.22歳	
性別	男性	36人 (37.5)
	女性	60人 (62.5)
	その他	0人 (0.0)
職業	教諭	54人 (56.2)
	養護教諭	6人 (6.3)
	寄宿舍指導員	25人 (26.0)
	福祉作業所	4人 (4.2)
	その他	7人 (7.2)
特別支援・免許の有無	56人 (58.3)	
通算教職経験平均年数	15年0か月±8年0か月	
特別支援教育教職経験平均年数	14年2か月±8年8か月	

2) 信頼性の検証

内的整合性法を用いたCronbach α値は、各領域で「0.55~0.85」であった。また、質問項目全体を通してのCronbach α値は「0.82」とかなり高い数値であった(表5)。

信頼性について「からだに関する知識と表現」(Q1~Q3)の Cronbach α 値は 0.73 であった。Q3 が削除された場合の Cronbach α 値は 0.74 になることから、「からだへの快と不快を理解する」学習としては信頼性が若干低めになった。

次に、「性に関する安心感」(Q4~Q6)の Cronbach α 値は 0.85 で、高い数値となった。

そして、「性に関する自他の認識」(Q7~Q9)の Cronbach α 値は 0.55 と低い数値となった。Q9 が削除された場合の Cronbach α 値は 0.71 になることから、「性の多様性の認識」についての性教育実践としては信頼性が低かった。

表 5 QOL の観点に基づいた性教育の成果評価尺度における信頼性の検証結果

構造	平均	標準偏差	項目を除外した場合 の Cronbach's α	Cronbach's α
からだに関する知識と表現				0.73
Q1	6.87	1.54	0.67	
Q2	6.19	1.47	0.51	
Q3	5.89	1.79	0.74	
性に関する安心感				0.85
Q4	6.43	1.68	0.80	
Q5	6.17	1.78	0.71	
Q6	6.17	1.85	0.84	
性に関する自他の認識				0.55
Q7	6.58	1.71	0.43	
Q8	6.75	1.64	0.41	
Q9	10.45	4.90	0.71	
項目全体				0.82

Q1-Q8 (最小値=2, 最大値=10), Q9 (最小値=4, 最大値=20) $\alpha > .700$, $n=96$

3) 構成概念妥当性の検証

SEM を用いた分析の結果、GFI=0.913、CFI=0.958、RMSEA=0.083 となった (図 1)。GFI、CFI、RMSEA の値が高い適合度の範囲内にあり、性教育の成果評価尺度の構成概念妥当性が検証された。

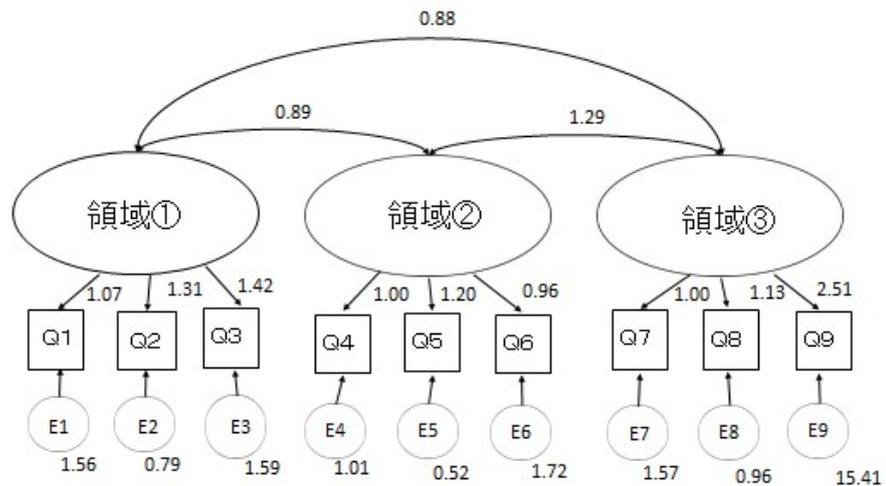


図1 QOLの観点に基づいた性教育の成果評価尺度におけるSEMの結果

IV. 考察

信頼性について、「からだに関する知識と表現」領域の Cronbach α 値は 0.73 で高い信頼性だった。しかし、Q3「からだへの快と不快を理解する」が削除された場合の Cronbach α 値が 0.74 になることから、統計的には「からだへの快と不快を理解する」は削除した方が良いという結果であった。しかし、からだへの快と不快を理解しそれらを表現することは、性被害の防止にもつながる項目であると考えられるため、本尺度には必要な項目である。削除しない場合でも Cronbach α 値は 0.7 を超えているため、十分な信頼性があるといえる。今後、本尺度を使用する教員に対しても、からだへの快と不快を理解し表現することが性被害の防止につながることをマニュアル等での明記や説明を通して啓発することが必要であろう。

次に「性に関する安心感」領域の Cronbach α 値は 0.85 であった。「性に関する知識を得ることで安心感が得られる」ことは、知的障害の有無に関わらず、重要なことである。二次性徴に関する実践は、現場でも頻繁に行われている実践でもある。性教育での授業の理解度は知的程度によって違いはあるが、繰り返しの学習の中で、身につけていってほしい項目である。

「性に関する自他の認識」領域の Q9 が削除された場合の Cronbach α 値が 0.71 になり、この領域の信頼性が上がる。この結果は、Q9 が削除した方が、信頼性が高くなることを示している。しかし、Q9 は、今後、性教育に必要な項目であると考えられる。

「性の多様性」の問題について話題になるようになってきたのは、ごく最近のことである。文部科学省も 2015 年 4 月、「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」の通知を出しており、教職員への理解啓発はこれから必要だと考える。また、渋谷区や世田谷区、那覇市における「パートナーシップ宣言や登録」に関することなど、徐々に広がりを見せてきている。さらに、自由記述の中で、「性の多様性に関する学習自体に取り組んでいなかったため反省している」、「そういう視点も必要だと感じた」という意見もあった。「性の多様性に関する理解の有無」によって、性教育実践の質的に変わってくると考える。今後は、自分の「からだの性」と「心の性」とに違和を感じている子どもたちにとって、配

慮した授業や関わり方が教師として、大人として必要になると考えられ、性教育実践でも、そのような観点からの評価が必要になるだろう。

QOL 向上の視点は、医療分野だけでなく、教育機関や福祉機関の中でも重要かつ基本的事項となっていくと考えられる。特に、障害のある人たちを対象とした教育や福祉では、「QOL の向上」と「障害者の権利保障」の観点から、性教育の実践を行うことが必要とされる。

本研究のように、「QOL の向上」と「権利の保障」の観点を取り入れた性教育実践の成果評価の尺度の開発は、日本でも初めての試みであった。性教育実践の成果評価の信頼性と構成概念妥当性は、信頼性及び構成概念妥当性が検証された。信頼性検証の結果、すべての領域と項目で十分な値であった。

V. まとめ

障害のある人たちに対する性教育のニーズは高く、特別支援学校や福祉作業所で実践が行われてきている。しかし、その成果評価は、ほとんど行われていない現状がある。

そこで本研究では、「権利の保障」と「QOL の向上」の観点から、「障害者の性教育」の定義を作成し、それを基に成果評価尺度することを目的とした。また、性教育の成果評価尺度に関しては、「からだに関する知識と表現（身体的領域）」、「性に関する安心感（心理的領域）」、「性に関する自他の認識（社会的領域）」の 3 領域と 9 項目で構成されている。定義に関しては、「障害児（者）の性教育」を観点に書かれた先行研究を参考にし、さらに、性教育特別支援教育研究者 2 名、現職教員 1 名、大学院生 2 名で、他分野の尺度を参考に作成した。また、2016 年 8 月～9 月、96 人を対象に、信頼性と妥当性の検証を行った。その結果、「性に関する自他の認識」領域の「性の多様性」に関する項目のみに関して、信頼性が低い数値となった。しかし、性教育の実践を行っていく上で、「性の多様性」に関する観点はとても重要であり、性教育実践の質的変革が今後期待される。また、構成概念妥当性についても検証された。

付記

アンケート調査にご協力いただいたみなさんに心からお礼申し上げます。

文献

- 1) 外務省 HP(2014) 障害者の権利に関する条約.
- 2) 千住真理子(2015) 障がい児・者の権利と性教育. 季刊セクシャリティ NO.73, エイデル研究所.
- 3) 東京都教育委員会(2005) 性教育の手引き.
- 4) 田崎美弥子(2013) WHOQOL26 手引改訂版. 世界保健機構・精神保健と薬物乱用予防部, 金子書房.
- 5) 浅井春夫(2014) 国際性教育実践ガイダンス (指針) と日本の性教育の歩むべき道. 季刊セクシャリティ, 65, エイデル研究所.

- 6) 永野佑子・関口久志(2009) 障害児教育も性教育も子どもと向き合っつくるもの. 季刊セクシャリティ, 43, エイデル研究所.
- 7) 任海園子(1998) 障害児の性教育. あゆみ出版.
- 8) 横内光子(2007) 心理尺度の基本的理解. 日本集中治療医学会雑誌, 14(4), 555-561.
- 9) Han CW, Lee EJ, Iwata T, et al.(2004) Development of the Korean Version of Short-Form 36-Item Health Survey: Health Related QOL of Healthy Elderly People and Elderly Patients in Korea. *Tohoku J. Exp. Med.* 203, 189-194.
- 10) Chronbach L(1951) Coefficient alpha and the internal structure of tests. *Psychometrika*, 16, 297-334.
- 11) 豊田秀樹(1998) 共分散構造分析 入門編-構造方程式モデリング-. 朝倉書店.
- 12) Steiger JH(1998) A note on multiple sample extensions of the RMSEA fit index. *Structural Equation Modeling*, 5(4), 411-419.
- 13) 室橋弘人(2003) 適合度指標概論. 豊田秀樹, 共分散構造分析 疑問編-構造方程式モデリング-. 朝倉書店.
- 14) 韓昌完・小原愛子・上月正博(2014) 特別支援教育成果評価尺度 (SNEAT) の開発. *Asian Journal of Human Services*, 7, 125-134.
- 15) Han CW, Yajima Y, Lee EJ, et al.(2006) Validity and Utility of the Craig Hospital Inventory of Environmental Factors for Korean Community-Dwelling Elderly with or without Stroke. *Tohoku J. Exp. Med.*, 41-49.
- 16) 小塩真司(2011) SPSSとAmosによる心理・調査データ解析 第2版. 東京図書, 193-194.
- 17) Changwan HAN, Natuski YANO(2015) The Verification of the Reliability and Validity of Inclusive Education Assessment Tool(IEAT). *Asian Journal of Human Services*, 9, 63-72.

ORIGINAL ARTICLE

Development of the Sexuality Education Assessment Tool based on the Point of View the QOL

Yuki FUNAKOSHI ^{1) 2)} Aiko KOHARA ^{3)*}

- 1) Graduate School of Education, University of the Ryukyus
- 2) Okinawa Prefectural Naha Special Support School
- 3) Faculty of Education, University of the Ryukyus

ABSTRACT

Background: Sexuality Education is needed by people with disabilities. It is practiced in Special Needs Education schools and welfare work places. But the assessment is not done. Object: In this study, we aimed to define “Sexuality Education of people with disabilities” based on the point of view of guarantee of rights and improvement of QOL. Additionally, we aimed to make the Sexuality Education Assessment tool. The Sexuality Education Assessment Tool consisted of 3 domain; “Knowledge and representation of the body”, “Sense of security to sexuality”, “Recognition of oneself and others to sexuality” and 9 questions. Methods and Result: In a cross-sectional study, we collected the 96 data in Okinawa Prefecture in between August and September, 2016. The reliability of the coefficient of Cronbach’s α were over 0.7. The validity was valid based on its goodness-of-fit values obtained using the SEM. These results indicate has high reliability and construct validity. Low score only “Recognition of oneself and others to sexuality” to “Sexual diversity”. But Sexuality Education is very important point of view “Sexual diversity”. And the sexuality education is expected qualitative change. And, the assessment is verified validity.

Received
December 20, 2016

< Key-words >
sexuality education, people with disabilities, QOL

Accepted
February 1, 2017

*Correspondence: colora420@gmail.com (Aiko KOHARA)
Total Rehabilitation Research, 2017, 4:47-60. © 2017 Asian Society of Human Services

Published
February 28, 2017



- Editorial Board -

Editor-in-Chief	Masahiro KOHZUKI	Tohoku University (Japan)
Executive Editor	Changwan HAN	University of the Ryukyus (Japan)



Aiko KOHARA University of the Ryukyus (Japan)	Jin KIM Choonhae College of Health Sciences (Korea)	Toru HOSOKAWA Tohoku University (Japan)
Akira YAMANAKA Nagoya City University (Japan)	Kyoko TAGAMI Aichi Prefectural University (Japan)	Yoko GOTO Sapporo Medical University (Japan)
Atsushi TANAKA University of the Ryukyus (Japan)	Makoto NAGASAKA KKR Tohoku Kosai Hospital (Japan)	Yongdeug KIM Sung Kong Hoe University (Korea)
Daisuke ITO Tohoku Medical Megabank Organization (Japan)	Minji KIM Tohoku University (Japan)	Yoshiko OGAWA Teikyo University (Japan)
Eonji KIM Hanshin PlusCare Counselling Center (Korea)	Misa MIURA Tsukuba University of Technology (Japan)	Youngaa RYOO National Assembly Research Service: NARS (Korea)
Giyong YANG Pukyong National University (Korea)	Moonjung KIM Ewha Womans University (Korea)	Yuichiro HARUNA National Institute of Vocational Rehabilitation (Japan)
Haejin KWON Ritsumeikan University (Japan)	Nobuo MATSUI Bunkyo Gakuin University (Japan)	Yuko SAKAMOTO Fukushima Medical University (Japan)
Hideyuki OKUZUMI Tokyo Gakugei University (Japan)	Shuko SAIKI Tohoku Fukushi University (Japan)	Yuko SASAKI Sendai Shirayuri Women's College (Japan)
Hitomi KATAOKA Yamagata University (Japan)	Suguru HARADA Tohoku University (Japan)	
Hyunuk SHIN Jeonju University (Korea)	Takayuki KAWAMURA Tohoku Fukushi University (Japan)	

Editorial Staff

- Editorial Assistants	Natsuki YANO	Tohoku University (Japan)
	Sakurako YONEMIZU	Asian Society of Human Services

Total Rehabilitation Research

VOL.4 February 2017

© 2017 Asian Society of Human Services

Editor-in-Chief Masahiro KOHZUKI

Presidents Masahiro KOHZUKI · Sunwoo LEE

Publisher Asian Society of Human Services

Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ash201091@gmail.com

Production Asian Society of Human Services Press

Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ash201091@gmail.com

Total Rehabilitation Research

VOL.4 February 2017

CONTENTS

ORIGINAL ARTICLES

Current Situation and Issues of the Sensory Integration Method: Case Analysis of the Sensory Integration Method in Okinawa.....	Haejin KWON , et al.	1
Trait Meta-Mood and Memory Bias in Non-Clinical Depression, and Preventing the Onset and Relapse of Depression	Kyoko TAGAMI	10
Relationship between Psychological Evaluation and Physiology and Pathology on Educational Outcomes of Intellectual and Multiple Disabilities Children.....	Minji KIM , et al.	25
Basic Study for Development of Assessment INDEX about Curriculum of Psychology, Physiology and Pathology for Person with Disabilities: Focusing on Undergraduate Programs of Special Needs Education in Japan.....	Mamiko OTA , et al.	34
Development of the Sexuality Education Assessment Tool based on the Point of View the QOL	Yuki FUNAKOSHI , et al.	47
Comparison of Achievement Degree of Inclusive Education by School Size in Yaeyama Area; Using Inclusive Education Assessment Tool (IEAT) and Case Examples.....	Mitami TERUKINA , et al.	61
A Study on Factor Affecting Educational Assessment in Curriculum of Special Needs School for Physical Disable	Natsuki YANO , et al.	87

Published by
Asian Society of Human Services
Okinawa, Japan